

4341
5

夏水流花後卷之五

四卷之三

詠

「何も小ごそするのみ今でつまむに代りて
りうねば乍ら香爐もまけてあらずやあら」
破口にてかけりゆきふれ
ふき介まくをつくゆゑぬぞ 詠
「ゆうすゆくとよもろかな雪人
たけじひと安あわゆくゆのてあらの城」
詠
「御ちや雪人とも 詠
雪人ともあるまれり」
詠
「モウうるおぐトモヌ 詠
何をちよこかえり
けりきりけりけり 詠
「ヨリヤどももものちやゆゆぢやうふうとゆほ
いが清セア、つれてとひもとまみ事ひのよひに
とひうりせ伏見町のかかと庵へ渡せとひすすみのこの人を知りてす
因の本より鼻とそげぢや毛皮して男とちやの城」
詠
「アバハラシト城も熱」
詠
「あいサア詠布番

松林

元
書
上
前
印

燭の代金みすすあ後も残まぬとき
 お引ノそんまうは金を破
 と主でま一交今のかうるは要りてくまくわに
 錦く清てぬ
 おまくもなんまうるはまにじぐとまをかうぬえんまのよま根う正直を寄
 つめくまもよようてコリヤ先へまううすまえとちうとうくらそへ
 ひだりマひくまくとくとくと思ふ性あやまうのほしてえ
 ひまくまくとくやう法孫みおまくげ後ちうくまがむすとよくま
 けやりよそくみれんすむなひぐこまき深てゆう遠處てちくま旱
 くまはく令どぞとあくままで向之海へまちも清され耳ふくま
 なれ 三月の嫁へ毛本とけくねよりてひんまくマアく
 菅ふわもすみてかこと令と因よと仲男圍ひうまぬれとあ人
 ううせんたをあくよようて念のあもやうりてくまうとまえ破却へとが
 ませ。やしく腰くの不潤はや一もよふえう。懲り徳えもま
 やくまくまアハテさんみんえう。妻あまう妻あらうのうえ徳
 技ぢやさん。 男あもえアモドケとまもあくめあよまくの妻
 家よ二日あやうなイヤ又やうせ。 うぐみくわくまくとまく金
 くふおまくふもとくにじもとけ。 まよとけ妻ひづやとんき
 モウかぬアキト。 うくま。 お引市まで。 お引イ何ぞ用へ。 ト侍八
 侍那ぢやまくはま入はせうで。 まよとけ妻ひづやと
 ぎあくよ。 傷家のはあへがまくで清せと。 世人とひざぎよられ
 ひサアそれあやうく傷くちやまくへの。 あやまくとすじ
 清せひろ傷ても。 やまくまんはば。 うぐみくわくめじくうとく傷せ

破^{アシ}き傳人^{トラン}ぬりづかの^トの トあつぐくふるひの御市もりくく^傳
 ゆうとめあんえや^トとく櫻^{サク}がゆみあつてこほした^シ
 破^{アシ}サ^リきのまのくちの^ノのうちの櫻^{サク}へたらやそんとよんき^ミを^シせらも
 こみそんのうけぢや^マハテ^{マニヤ}^ハハテ^ハねうんのれよ及^マくわうどのをね
 分^モおもて^ミ^ア
 二^ニ弓^の肉^のうつ^ミの^ののうく^ハ刀^引挽^ひ五^く^ス 传^シ手^ハく^ミ
 つ^ト山^山の^のりと^くぶま^セで^ト 伝^シ和^ハ代^ル先^シ今^タハ^レにけ^ル
 座^シ安^セと^シせん^シく^ハう^トい^ハ逃^ハも^ハ死^リ思^フ一^モは^シと^ア
 れ^ハを^シて^アの^ハを^セげ^ハお^ハゆ^ミヤ^レく^ハす^ミ世^シを^ハく
 破^{アシ}口^リや^ハ暫^クお^ハり^ハ三^ミセ^ハね^ルわ^タれのうの^のう^チの^のす^ミ
 や^ハも^ハ五^マ十^メふ^シと^ア明^ハて^トう^リ先^シじ^シの^の妻^シを^ハ

今^タ年^に春^の生^むが^ハ金^{まと}と^ア金^{まと}と^ア金^{まと}と^ア金^{まと}と^ア金^{まと}と^ア
 そ^トも^あの^ハ金^{まと}と^ア金^{まと}と^ア金^{まと}と^ア金^{まと}と^ア金^{まと}と^ア金^{まと}と^ア
 明^日中^にま^うの^ハ金^{まと}と^ア金^{まと}と^ア金^{まと}と^ア金^{まと}と^ア金^{まと}と^ア金^{まと}と^ア
 の^ハ金^{まと}と^ア金^{まと}と^ア金^{まと}と^ア金^{まと}と^ア金^{まと}と^ア金^{まと}と^ア金^{まと}と^ア
 始^ヒを^ハな^ぞ^ハ 月^ハを^ハ又^ハ腰^を舉^ハ ト^ア ヤ^サを^ハ
 腰^を下^さそ^トま^まあ^まつ^ト 月^ハの^ミの^ミも^まも^まも^まも^ま
 幸^トあ^よ生^ハと^ア命^を下^さほ^トの^ミ情^シま^もも^下て^アや^リキ^シと^アア^シ
 ま^くう^シく^ハの^ミを^ハ月^ハく^ハ腰^をま^ハも^ハう^トび^ハく^ハね^んと^ア入^ハゆ^ハれ
 モ^トう^シ度^マや^アき^トそ^トみ^わ代^ルま^ハコリ^ヤま^ハま^ハま^ハ
 を^候あ^やま^ハの^ミ一^ト屋^を麻^のの^ミも^アと^アま^ハま^ハ
 初^モう^シま^ハハ^テ放^ハ難^をむ^ハか^ニト^ア放^ハ 月^ハの^ミの^ミ

口先の聲爲づやとて今もそよがめけさせぬ何もこそ金兵
ぢやはしもすらまゆううとあらむ。槍の首筋はとも實
きやややつぬ。『イヤこのうににてやけに難かえりやくを
のまふとどひゆるとへあるよ。武士ととくもくちとれます
て人めざすぬどおやうげでゆじとサアリま一言ゆうくがよ
もうニツふがうち放きをぞよ。『図々んまのそんよ挙げふのま
えりやもも挾うしの町人でもあれはの隠人切とくもあつてぢ
そせと武士の槍槍で人がまよまる加多やされ。『イヤくさ
きの難云モウナ写るがとうぬそよコリヤゆくとお島よくびぐ
とばどよ。ト徒人よ自うど。『司刀ひゆみまくわゆうサアく
まくく。『あめうまやううとうぬ。ト徒人よ。『司刀經度

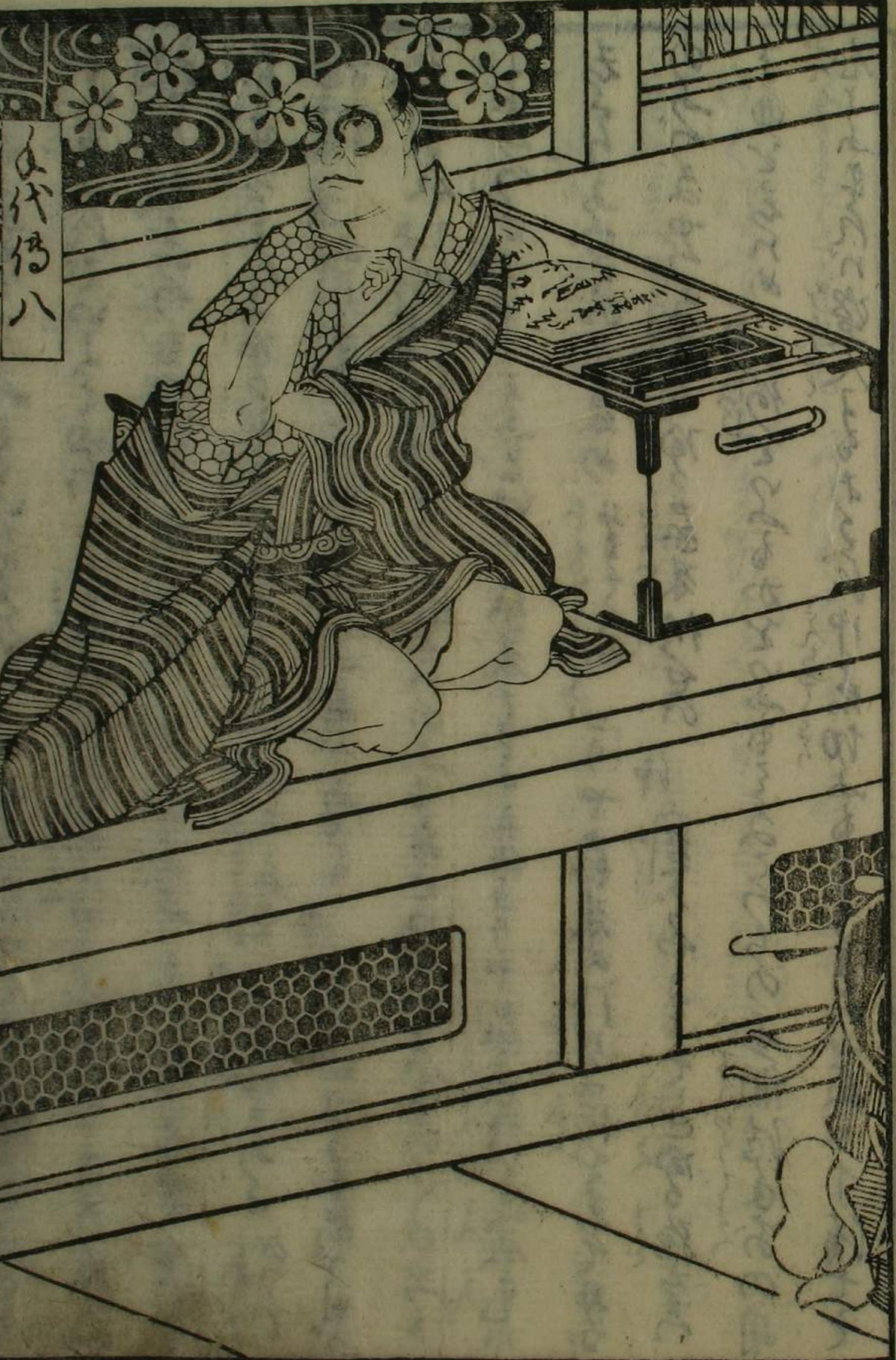
マテくお給ひまうませ清セモコリヤとせくねまやトのういみを。亦
ハテ切とりか田のまやトつらう。『毛のまやももあら
とまづやハテ放ちうしてわやの。『何とかまうまくのをな
じて出ひまう切くくる。『サ。『少をあらお後をまくのを言
うね。『つれてマテお給ひされ、あまきの左井やあれうじ
のじくおまうレキと。『毛のまやあらあう。武士のまやすまう
もまうきのまうくばつれせくまくハテ放ひう。若ひまうき
ハとて放り捨棄えやう。『つれ射合ひふくどう。『行へなまよ。あ
うき。『清セモセキ。『おまやざくのあらかよひうてそんまうまであ
人よまくまうのあらふれどや室や。『おまよ。おののままであ
くまやつまうまくまうぬ。『あくまよ。『あくひうえどやめきがよまよ。

まふよりやのくとせてマアの内て若年のもあらむと
相方のまつね縁をまやまくひなみのまの毒えまう
てれきりゆまやまへまゆまをまくのひまわせゆわぬ
ゑのやつもやうわはばがまくみる代若あらく金拂の歎入
しやほどもまうちまこじらかくさりふらぬの破用
そまちやまえとアノ香爐うよててまよはよ備くみたの破
めの^はヤカエヌア今先聲くうせのふれあをふらま
ままでゆく殿のゆまく御ぬ席すたも^はアヤサアモ今
おじが教おとまふと嘗てトモと令もやされどもあらと
うふやうへまへまの^は志やくまくおけの香爐とあらが
まとの^はサアモまようくアリをト教^は御^は志^は
まじてもお仕^はたくらかうく正陰つまんこうちやうとまうと
まく旦那の耳へはけハシ^は義^えをまますのう^はア
あまぬ^はサアモまう令席すてたも^はサアモ人^は。ヤ^はア
まくやしてアんでもまくまのまふはま體とまくまう^は
おまや體をまくまのなやまほのうまへまてコリて餘下
くまくまてめはう後^まのよ^まてからこのまく^は
まくまのま^はア^はイヤモニ^はあうイヤ^はとまくまやくヤ
まくまをまくま^は代めまんふもまくぬやもとやすうてまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
サア今と出一やまにたまぬまくまく^はトた^はア^はの^はア^は
若^はやいふよまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

く悪にゆじとすをうきたまとのめをすや後うのぬゑそ
せうけとてゆじとすをうきよふうへりく 降
あらまき共
夷うかよした清せよはしもよくいきよくの夷の夷
歌方豫をうきせもあり出侍ハ首筋つうひうつうとくとく
みを能くはうとく枝て切きる利徒れとうと移ち上船だ
きく我舅三河居平山 里 ヤアとよきへハテハテお物も
よみに体よ以合外ぬ出来るとみねえまたえまき事
津
下トキミキと家をよせり田男もみくすりとくとあゑい不
よ鬻うあく蟹のてめあけよと水底莢の蟹子をあせよひに
て處々す歌方へれともちく 強
とく魚のうちをすあのよ代も綿もうと承ふとゆつま

うてうがごくとわきにわねむもだ金とゆきくわく清セ
えが五個はぢや殊よみふ市とゆ仲軍で吹吸びぬ志行も
まや花見えゆマア一休は牡丹の香趙とゆく合意がいぬ。ヤア
こりや賣わ 附 そんきうそりやみをす もの見るにうれま
作 雪うき清せさんとまくうけ安と 金
坐みのじや 附 網市めどがうけとがくうきと金とくへと
あまゆつべじや毛役のゆ仕事とやううせりよまくとう
ひてわくよれや、ざんま大うなふまきとどくちじてわや
あやうませもくのせりせがどうもこつも途絶てくられくよ
もなじてよすよえおまくいは自らおれれをじてくがくよ
ぐうとづれづんのゆううきとくをがまといとぬぞよひ

圖七九 良兵衛



元のあみ内よとまつらま
 ひめいのまどをもあうの明り
 そくまんざいよとゆてもゑあわぬ町人わくとねむよれの處
 銀方もどうもひがえりゆくあくみそもめうなつてもいや
 あゑちどりよやうぞ今いゆうぞト安すとも。おがねまよびつり
 あゑも。おもよひまでとくおきよ用がある。司はなまあがれ
 あくと。トリがるふはそくおとひのふくまくひのく。そ
 ようと。司もまのざかまくまくのコリヤおゑ門に何ともせや
 まくらふうてのあめ。トもくらふコリヤおゑ門に何ともせや
 のづくまやうみほりゆく本修せ。淨國。あよそ起ゆる猿を
 まよとぞめ。猿。何をつもかとつもまくうちの玉網はすの用
 ふくふもんが聖人ともあくじゆく切ふもとくまくせぬヤイ清七そ
 ちやをとまくもあつけを。要ふそくぬりのを争くせうてふびんと
 みくはくまと大まの令とくもくひ負因あはゆのうち
 とくらきくまくよあづくらがや。司。引うねりでくみ清よきて
 やり外うえのまくまく令のつまゆもあまば
 九くまへうねり志めくはんへうけ井ぬサア清ち處つまくそよ
 弥ふサ、ちをあうま。猿。司のやくコリヤ清セまくあみ内下
 形でいほしては猿をもあづくらコレ色とく。このあもがまと
 や事とのひまとくもくめを。司。ひくまく不面もとおみく
 あもあくとお情ふうのゆとく。司。ひくまく不面もとおみく
 あもあくとお情ふうのゆとく。おちゆにあいどまぐくてゆくまます
 そねがひのうち。接屋をあて下さうま。津。司を海よ敷とも上

どモウか猶と坐せばあづまき焉と肩の荷を負ひてあらんや
おうび表へ坐まば 族コリ セイくはくはくの始末豫ち
お目めとつあがあゆくぬひもト内への内
ハまくえまとも差あつてまぐらむちが科支をよ一旦いつに引
がせきがお業わざ逃なげかまふやごてコリヤ堪忍のさうかんさんさんの推
もすなぬ後ごりんふんノウ音おとをすゞやえいういを
う外外とかたんをばイヤだんみのゆるぐと承うけゆものの入生を
ゆゆ 族こめくもを多まちで坐すわりゆう 族坐すわの 族立
まな 族せうんがもゆうのまど見て下さま 族立たつかかとまうゆくら外
候ま 族立たつく ト肉にくと見てまくまく 族テ放はなマアいん其そのの 浄きよく連
あらとおそらひ金かな 族ヤレやれくびつくびつとととあくまくまくとをくくとをくく連つづて坐すわりゆう世よらも店てんに肉にく 族ヨリヤく。コリヤ候ま 族立たつ

豫よ河かとまうくもうぞのあひ表あひあらわしと併あわせてとうりと候ませ
かえふどうもこいつもア一日も苦くるのゆじららがなれあ無む事ごの餘あまに
年と周まわせき事ことよきう候ま候まよたりぬつきねつきトラクリトラクリようう孫まごら
ちちためのゆきゆき候ま候まよたりぬつきねつきトラクリトラクリようう孫まごら
あらとおそらひ金かな 族ヤレやれくびつくびつとととあくまくまくとをくくとをくく連つづて坐すわりゆう世よらも店てんに肉にく 族ヨリヤく。コリヤ候ま 族立たつ

不坐ふざせや清きよせや御ごもあてもがつまくとやけくやうたをやア、
體から毛け急せき被はけ 族周まわせき表あらわしよ入いまうあもゆゆとぬ孫まごの併あわせ
人のまえまえととうひひ 族ヤア清きよささモウいもあうたううたうまひよよ頭かぶ
ううううううともせめく教おと見てまうとうめもとゆりきよそひん
えすにううくのアア令れいのすびととお詮みことあひ見みよそひん
巴あもぬう層そうのわゆゆあくそとと表あらわしとまうが候まりうてうて

おやどもあらうにむかひてはるのとく船をりあひて
げしが死んであはば一ふとひしてはるの今ので
ひつまびとひてはるア入もうまじうてこひのえ
とくふみだやく海シマもとあるもの一もとひらひて
船ボウよしむらがもどり利刀せのねんシテ共みへり一連
そと海シマもとれは教の母モトや姉シマの口ヒが死スルて
をうめんをひきあはれても今ひかとたどしてみやうや
も一女教メイコが死スルてたま一女めのふハタチもめをばあ
くとめのびゆきまかう乳母ヒツリのめりそばうふとおふ
海シマがほうちけのふハタチ母モトや姉シマ上シマまうねびつこう
あえがもけどんまいとまとあづシマうめとまとこと

まよとくあれとてうにこよひかさんのはれがやうひよま
で殊教シムギくわくわくふのふハタチうそんうアノ母モトのわたりや
まよとくわくわくアノ殊教シムギくわくうふハタチ外サバ仲シマいのよみやでもある
とうてわくふのふハタチ引ハタチよもよいわねやみちやの生れ病モト
えあシマ外サバりぬやそあまへひまくぬやみちやの生れ病モト
十七年のまが日までそぞとよきこのうごにまぜかとくとてを
さう外サバぞうせ海シマてひまくぞひのふハタチあの人ヒトのえんちまひのふ
くまくまゆといひのふハタチ引ハタチよもよもざあくごとひやマア教シムギ
のその教シムギを境シマで又ハタチうん目ヒトがほんとてゑののサアシマでもか
かくえくえんがくくもあにそあられてもなまにやりふやまの
そと海シマかじ初ハタチももきかえりととあまと清シマせどと

得のある事はうぞうぞがちるまかうよふ新くやう外のものより
 えいとちやくやすれども行くへ因へ新しとくらゆばみうね
 育ぬけぬづきはしあまげぬ清ちぬハテやまくのまにまこと
 うくマドカまうとゆくくら且取ぬのがみにふくどせても
 と思ひてゆくうちやもひもうぬ清さぬの法をとまつてゆく
 丈人の九くまくじの正教ぬがせ教あまむくおまの事をひえ
 ごうあ代うやなるゆもあらともがまくとやすひ法てまうまう
 うのをぐり走るまかぐりうめがのくえそくやもつまう
 知ぐるらうくぢやうせれでもえまくどよふやくで刀をまれが
 あめやがみのくわふたくさんむ食てうんとのふとつめをく
 一旦云うじと男へ立ちゆまくのま一ぱくぬを女とやすそれあうて

ひでふえひが第一ゆまくの身よ義のことがみううばとくへんの徑
 ききりゆうサ役よあつて義の身でれえんら役ゆくとや
 てぢやざるのふとてこの身の大病うアソよううがゆまくの目次
 见く外ぬうさんまとせーたら生べ死であまうもやう引かざる
 アく 孫 乳母よく用がある来てくまによ 下 ハイくそれへ義う外
 モウまう外アヒ取ぬのさんまよとくえんもあらうようと用
 があるよとくとせうてゆれまう。下くやのく 下 侵めぞうて
 そへとひそめ 下 やまくべーちアノやみよの六つの年ゆまく
 かうてあつてよとくとせうてどもあらうがゆまくの六つの年ゆまく
 抱えへうんでうがゆかくねどよみちのまくらひじす
 のゆえうにじう死ぐをうじうじよううせりゆまく育て

たもこれぐれたのひざやとよと恰てのやみをやまづひ
並えけうどが食うもうち切よやくえあうたすふかそぞてや外
とつあくまびをうども胸うまでたすんえれといひざやを
せせでれのひ胸ちやとせあらてせんねをかき立つまかづ
と要ふねや嫌ふひざやあいとせうあやつねよひによきり聲
よと速ひの殺二人のみ供とあつらへ連てりとたもくせあ
て殺さへおもてらぬくも胸のとくが耳のそくふのと
つくわのきやれお家々のふたのもやめとを切よ育
てわう角三四五も殺でまく旦那あうあつあやつみく
回切してくまでうがお無事へせじて序引くゆくふとせ
あやつくと歎氣にとくとくねをモウ一生うくねまへふ

ゆとまもわくにとくとくの義い因の義は男へも翁だざく宣
くゑれ彦とくもふるひあうわけくまふのゑる巣口も本井
びれほしとくらうの跡入とまんざく殺ひをひどもせんの
おれとりもちまを切ふせりとそでくまひどく中ノ野
う風呂へ轍一つほりぐとせかのむとげくとげくおひれ
きうてくくともせまくのせみけのひくと襷よをよと今ひお樂
しとれのとせんやうて驚きとれて玉のようまわすほてかを
のひ年もよしひ佐辟よ向つとおまんじうげ何もうか圓白妻
でめひどりく胸ひかゑくとまくとまくとれ
にじうとよとやもひやうもよふ病ひでもあくまう内へつしまく
みとあくまくとれあまようかゑくとまくとれのアレ

せようとさんやこの乳母おとこも活死なまくも死しゆも死しゆの仲なかを
そりやあんまりもどかしくぢやしてよのふ 魂たまも聲こゑ
ぞくだけば娘むすめも終すて仕つかえく 仲なかで渴うながつてても憲けん
きたもややトアシ ゆのくとと合あわると傳つたへる
引ひよくもうまにうぬにこねりゆの乳母おとこ いとくも
そくまうめりお 仲なかのまとうまくと身みが吸くてぢや
マアいとくのよ いとくもうまくと身みが吸くてぢや
ぞくの、 ほりと泣なぐては利刀とでこしくこくでまくこくわ
のくもよまうまんせや今いまも身みを令めと不考ふこうみを
えがくもてほせぬのあまきもすすめあまはくらつゝ草
あとうや船ふねゆえうまくと身みが吸くてぢや

かあかあでも食くたうがみよきしが身みよ令めとてひる
どもあまづくとくもとくもいぞくとぞして今いまのて渴うなが
まくもくとくやうにまくとくしげのとくで女支めしよまうんの
引ひぞフリヤなんまとくのよ おのとくのとくちよひよまで
たぬぞくもくかまく千日せんじつへりつてりくやうやうくねくねく
と女支めしよまくさんぞくナキドやうひひりと大体だいたいと
およいをくじくせんぞくせんぞくにじうとくとくだ
してゆくとアシ ちりとおもわくとあと ひよく
用もちあまよきこぬとくとくうちよもあよゆくとく
みづくともう船ふねでいでもとあるまのとくとくとくとく



ガラニヤア戸棚のうどんとコトナリてのりと丸めり
のうどんしてたもヨリ毛ひき戸棚の健がまく朱ゆくとすん
ヌモでラウヰヌアキカゲねうがまく長ねとなんとこなうニワ
猿
ノリ二ツギタマアコマムともいそれぬあそながむく
ノリを
マアキカゲラウヰヌトマク
トモヌシモジル
トモトクドン会
レテタマラヨリシモクく上げてゆ
サヌラヌマヌルアの巻
因くふ金戸棚のうどんがりつてにしう只りもやりあすうが又
どぞかヌムアんあんとアドセアドセアモ
ヌムハヌ
ノリアんとアグニエスグニアラハ御とつある
乳
母よく今のがまごと金くとんなどヌとあけアタリヤ中
小まくろりとこまてキアトマスルが細高見してサア健度

ヤレく高うるまにうつくひくひくや筋もとみんゞよこれ
さう。うと走が筋ようよイヤかまうもモウ筋ぬらかんじや
むくとまじきそま筋じやがだらで筋くわくわく筋が二
筋すにせいやどまくうやどん何も筋ひとまくもこれ
サア筋これが筋くわくやうやえんと。筋筋モウうつてと
筋のよ乳かまくも筋やうやせきも筋よ上
ケとあして入ふる。アレあの筋うぢや上ねのあんくそく
可憐してらうと筋ふもあくもるううううううめよあくも
さうふイヤやんよ阿モス筋次にけううううううううう
ううううううううううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううううううううう
もあにして忍んでうとみんがいまげうううううううう
ううううううううううううううううううううううううう

そくやえうゑいままで二ツでひとはが二つようちれアヤア
ちよのふきみのうまくもんぐるびんせげとわやもんと今
のうき、ゆきのふ、そんきもじが今とまの。そんきは健
で戸ねどめて食とんと口づけのうれどがむのえどり、あひをうて
のがあらざいヌアマアらあうとあがぬあんせのヌアヨリ隠
えんとモリナアヨリあうじふら外上脚をくはせに腰
くまやるサアくともえうぬ着いをげ、一因もすアキ
まや着ぬをまごねどもあらとまうとまうと
の、サアのふうのふやうえうと毛根のまうのう首を
あつてくのにひ身にサアマア立ち上脚まで腰戸
へふう夜もるや四ツのあとうらひまで清せらやううふ

一にからうと肉のうとと仰りと門によ耳とよせ等ともも難
のかえうと着のき尾ともくととあよとたうへ差引あらく
表よ出、引ひんえまく候がやうてあるコリヤマアドアセがれナア
トツスミ俄、引ひくとくへおえうな、ヤア清せうるの、のまう色
や素アラモと口とけうぬけ後生とくぞうとおとよせて
くとも立だまがビヒ、氣使せようまア後とまとたりう
の、口やまのうとくううあやとわくとくのまく、利キも
よほりうみとくれまよ部のめくじてわくとくの
経養のえとくがゆまくのうとねよりつてみよけがもろきとく
ともふくし人まうだがうもくしてもまや食ふ、引それへのま
くすえああんはしようくたもそれあれ及ぎぬかのようじ

みうめりきよあくや、義久のひまくうぞのせうとみすゑの令
がでまくみれの上司くよう清セなど今セう人のもまくわ
戸は耳とよセワとよセアマニわく内うちも 俗 かえりゑく
獨 ほくよそくよそく人すく清セリ四つけの画屋のテ引有
田よゑびつ 俗 司 かえりゑくもふくらぬのゆでぢあま
ゆてく外一休今夜のそくと食食のへぬえふじやうれ
きまではけはげ戸口へんとやつてゆひともどがおきだえよ
うへまづるゑトうきゆて 仲 きはへそんあらアノゆりとあ
まちゑの 俗 あうだくあうかおもうゑりおながよがまゆ
とつまむゆきがゆまくあれふふどううゆきくじくく
おえうゑよあくや清セとがれまくつへゆまくよがびひてま
たまちやあせん朝方の内でのまくわくふとゆりてそまく
ゆくゆくのまくと入て金とゆもあざして金てぜぐとも今夜
うびてのくぐもうくうくういて金とくう金とくうゆづく
とある夜よ。とくくひてじやあまえよこれぞぞいや幸い
入ふ焉りとぞく 俗 まくじとむくゆうにまくまく
とくせ爲へぐそとくうあせんとくくう 俗 まくじとくう
あそく 俗 独 単用の相手へらそくらんさげくや 実 俗
八角ドヤスル 俗 いやよんをとあくまの 俗 い
うみそ尾で 俗 さア呑みかよりそえが豆のまけのふすあ
手とくまんとねとニウ刻の算用うてうのよまんせ 俗
とよみくまよふせうがうねまたいと云うのねねどや 俗

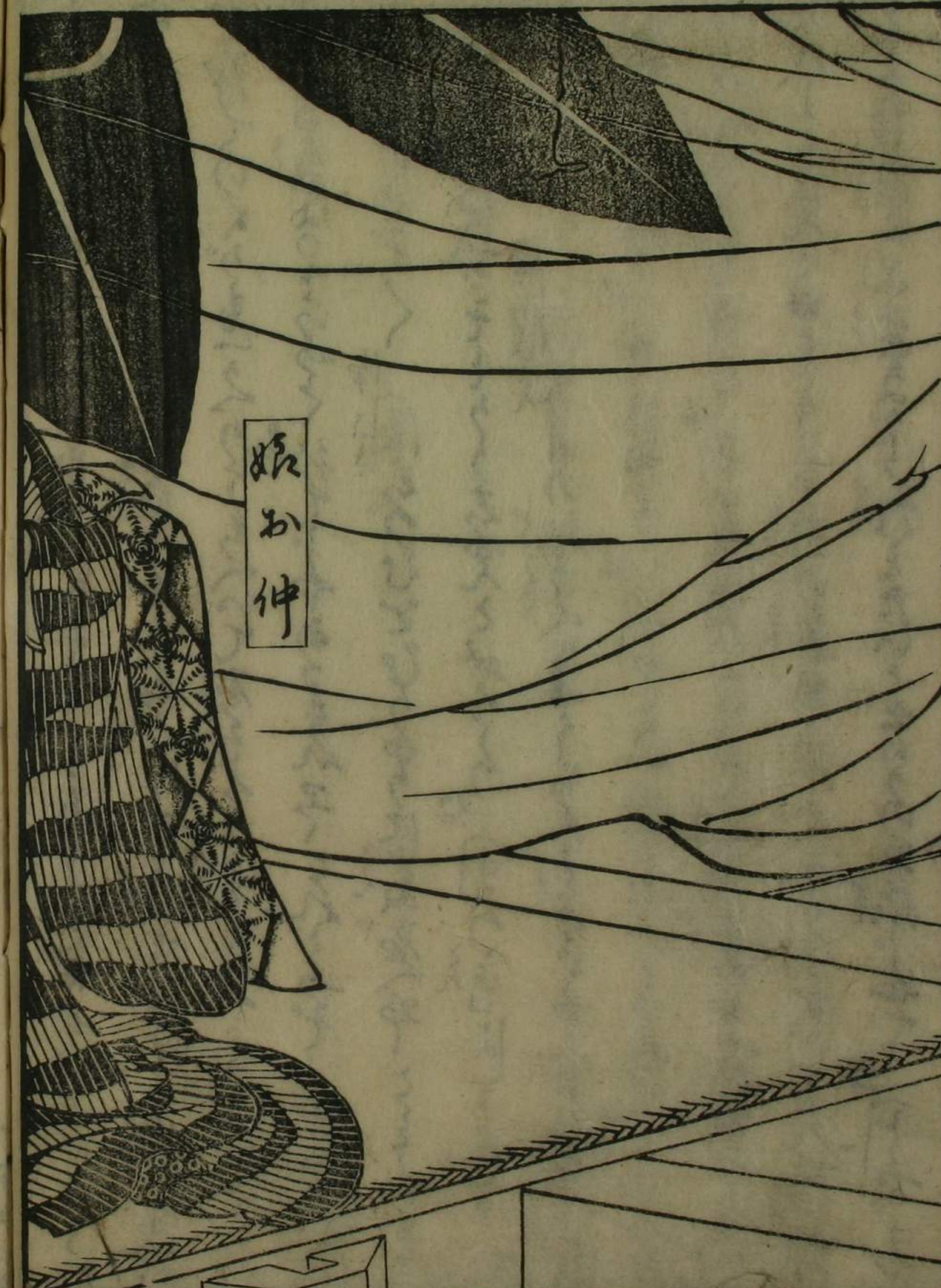
たまちやあせん朝方の内でのまくわくふとゆりてそまく
ゆくゆくのまくと入て金とゆもあざして金てぜぐとも今夜
うびてのくぐもうくうくういて金とくう金とくうゆづく
とある夜よ。とくくひてじやあまえよこれぞぞいや幸い
入ふ焉りとぞく 俗 まくじとむくゆうにまくまく
とくせ爲へぐそとくうあせんとくくう 俗 まくじとくう
あそく 俗 独 单用の相手へらそくらんさげくや 実 俗
八角ドヤスル 俗 いやよんをとあくまの 俗 い
うみそ尾で 俗 さア呑みかよりそえが豆のまけのふすあ
手とくまんとねとニウ刻の算用うてうのよまんせ 俗
とよみくまよふせうがうねまたいと云うのねねどや 俗

松林

姫か仲



松林



あめをうち イヤまごひまみうつてゆるやどや今夜連てのく
くら 二面でけまへ入て重ねづやまなまきらと用がもと太年よづ
ひまのフレがごうふとはきてつてくわぬうれ 司そらや人鳴や
はれ 郡ゆきが行とれおづきぬよよたのじぞや サア多て解て
わざみ わざめてくめつてふあうだてまふぞや疋かつてうてやれ
くとさうとくさんがおもちや海市たのじぞや 上 たのむくと
りひきと肉のまが 司とめうる海市ぢやまなまきら
えままとあづらから油ひりうす 司 上 油ひりうすと風引
うげサアや娘ゆきひとゆをよく審査の戸ぐらうりとゆう
おうげま 機 海市めう 司 ア清セウコリヤうさんへ 上 こりやせん
めくむりとがうつけがう活ゆき打よ肩えよう脊せひと大げき

ふゆくとせぐまむはらうきちんと勢よまくのゑのやまくとも
あらばれへる 乃 フル 海市。海市。海市。上 司とくらがりとくらうて
海市 ふう毛海市 今をととくは金とこむけくらの毛の金と
せんニヌ色こんでふうにと毛の毛く活ゆるゆ食ひ毛やもつ
てんこうりと歎とまひぞお眼もめうくとえくまふく 例へどん
ト袖へる 乃イ 例へどん 乃イ 例へくとどん 乃イ 例へ
きんやくししい毛でふんふもりまうがえに活ゆる毛とまく
上 二文もとほへる 乃 二文のまきりふ 乃 二文のまく 津 乃
かみへ ト破く裏が 例へく 乃 二文のまきりふ 乃 二文のまく
かみへ 仲と表ひ合せ 例へく 乃 二文のまきりふ 乃 二文のまく
ト子ヨレ 乃 二文のまきりふ 乃 二文のまく

文書後卷之三

幕

松林

